

将来の姿を描くことで、現在の自分を見つめ直すことをねらった実践例 〈3年生の取り組み〉

(1) コミュニケーションの実態

本学級の生徒は、男子4名、女子4名、計8名である。自閉的傾向、言語障害、脳性麻痺後遺症、ダウン症候群と併せ持つ障害も多様であり、S-M社会生活能力検査で3歳から11歳と幅がある。

理解力にもかなりの開きのある集団であるが、一方人間関係も含んでコミュニケーションの面で大きな課題を有する学級でもある。自分の思いや考えを表現することが苦手な生徒が多く、話し合い活動は成立しないことが多い。

しかし、作業を媒介にすると、それぞれの役割を通して協力することができ、お互いの力を補いながら諸活動に取り組むことのできる学級である。

(2) ねらい

- ・社会参加を目前に控え、自分の卒業後の進路を考えさせる。
- ・自分の将来の生活設計を考える中で、将来への希望や社会参加への意欲を持たせる。
- ・自己を見つめ直す機会とし、自分の障害や課題を確認するとともに少しでも自立しようとする気持ちを育む。

(3) 単元設定の理由

社会参加を控えているとはいいながら、まだまだ生徒たちには卒業後の生活を描くことは難しいのが実態である。自分の障害がどのようなものであり、そしてその障害とどのようにつきあっていくのかが捉えられていないために、現実からかけ離れた姿を求める傾向も強い。こうありたいという自分なりの夢を育むためにも、そしてその夢を実現させようという意欲を育てるためにも、自分の将来の姿を語りあい、友だちの夢を知ることが大切であると考え。希望を実現させる意欲は、漠然とした実体のないものではあまりに目標が立てにくく、かえって意欲を減退させることにもなる。そこで、自分の望む姿を少しずつ肉付けする中で、現在の自分の姿を知り、具体的に何に取り組めばよいのかを気づかせることができるのではないかと考え本単元を設定した。それはまた、将来の進路を自分で選択する力になるとも考える。

指導にあたっては、学級の実態が自制心の形成期から自己客観視の段階まで開きがあるので、生徒個々の実態（家庭環境、生育歴等も含む）に即して指導するようにする。そのためにも、生活一般での一斉学習と課題学習における個別学習との関連を図る中で、より個別の実態にあった題材を設定して取り組むようにした。

(4) 指導計画

学年	生活一般の単元および題材	課題学習の単元および題材
2年	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちのこと <ul style="list-style-type: none"> ・友だちの長所、短所 ○わたしたちの障害 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の障害、友だちの障害 ・援助するということ ●現場実習 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の進路と課題 	<ul style="list-style-type: none"> ○性教育「人の一生」 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の位置 ○版画「自分の顔」 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の姿 ○性教育「思春期」
		<ul style="list-style-type: none"> ○余暇時間の過ごし方 ●将来の自分の生活 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の生活と経済 ・身辺処理

	<ul style="list-style-type: none"> ●自分の将来 ・働く生活 ・結婚の希望 ○わたしたちの障害 ・10年後の自分 	<ul style="list-style-type: none"> ○わたしたちの身体 ・大きくなる自分の身体 ・自分のサイズ 	<ul style="list-style-type: none"> ●職業適性検査と自分の職業 ○性教育「性行為と妊娠」 ・性衝動 ・妊娠のしくみ
3年	<ul style="list-style-type: none"> ○友だちのこと ・友だちの障害の特性 ○わたしたちの障害 ・障害と個性 ・障害があってもできること ●卒業後の自分 ・進路を自己決定すること ●わたしの将来の生活 ・19歳の自分 ・30歳の自分 ・50歳の自分 ・将来の家族 ●卒業後の生活 ・20歳のわたし <p>*以上、1年間繰り返し指導している。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○版画「友だちの顔」 ○性教育「男女交際」 ・結婚と男女交際 ○家庭生活 	<ul style="list-style-type: none"> ○家族のこと ●過去の自分とこれからの自分 ●給料と生活 ・働くこと ・障害者年金 ○性教育 ・家庭生活 ・避妊の方法 ・自慰行為 ・家族計画

●は本実践事例に直接関わる単元および題材である。○は補足的な役割をもつ単元および題材である。

(5) 指導の実際

① 生活一般の授業「私の将来の生活」から

a ねらい

- ・卒業直後の自分の進路について、自分の希望を確認させる。
- ・自分の結婚についての希望、その理由や可能性について話し合わせる。
- ・30歳の時の自分の生活を考え、自分の望む姿を発表させる。

b 授業の展開およびその時の様子

学習活動	指導上の意図・留意点	生徒の反応
1. 19歳の時の自分の姿を発表する。 ・どこで働くか ・どこに住むか	1. 「人の一生」の表をもとに、一般的な人の一生を確認する。 今までにまとめた自分の進路を「19歳の時の自分」として発表させる。実際の進路先と異なったとしても「自分の希望」として、常に生徒の「今」の気持ちを大切にする。そして、今後の進路指導の手がかりとする。 自分の意思を表明する場でもあるので、「どこで働きますか」「どこに住みますか」と個別に質問する。	1. 自分の現場実習先に添った発言をする生徒が殆どであるが、Q男、H子、K子は別のところを希望する。Q男は授産施設、K子は3年の第1回の現場実習先を挙げる。 H子の選択が、1年の時の実習先であるように、生徒たちはこれまで実習経験のあるところから選択してしている。事業所に勤めたいという意欲をもつ生徒は、これまでもこの場で、実際の経験はなくても「会社」と答えている。
2. 「自分の結婚」についてどう考えているのかを発表する。	2. 「結婚」について憧れをもつ生徒がいる。結婚への希望を考える時、自分自身の障害をどう捉えているのかが、比較的捉えやすいのでこの設問に取り組みさせる。発表内容については今後の課題学習や個別指導の中で扱う。	2. 結婚の意思の固いK子、してみようかなというJ子、事業所で働けるようになれば結婚するというQ男、ずっと全く結婚の意思のないI子と反応はさまざまである。 指導を始めて1年半になるが、結婚へのステップを考える中で、自分がどういう状態であれば可能になるのかを考え進路を選択するようになった。また、自分の一生を考える時親以外に一緒に生活をする人が欲しいという希望をもつ生徒がでてきた。

<p>3. 30歳の時の自分について考え、発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> どこで働いているのか 一緒に生活しているのは誰か 	<p>3. 卒業時の進路先は長い一生の中で、ひとつの選択にしかすぎないことを日頃から指導している。ただ、一つひとつの通過点を、何を指して頑張るのかを考えさせたい。その意味で、30歳を設定した。卒業時、進路先が作業所であり家族と一緒にあっても、その時点では、就職し一人での生活であったり、または結婚して子どもと生活しているといったように、卒業後の進路の次を目指す姿勢を育てたい。それが進路選択への意欲につながると考える。</p>	<p>3. 卒業時の進路先と異なる生徒は4名。内3名は授産施設や作業所から、事業所就職を考えている。</p> <p>一緒に生活する人としては結婚を考えるかどうかに関わってくるが、K子は具体的に共働きの生活を設計する。結婚をすると言っていたJ子は現在の家族以外には考えておらず、ことは遊びの実態がでた。</p> <p>H子は卒業時の作業所から施設入所を希望した。</p>
--	---	--

② 生徒の変容～進路選択の面から～

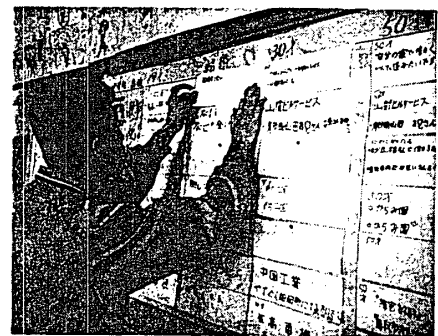
生徒	自己内対話の段階	1年前の〈将来の自分の姿〉	現在の自分が描く〈将来の自分の姿〉	希望する進路先
P男	自己客観視の確立	事業所就職 アパート暮らし 結婚しない	事業所就職 運転免許取得 しばらくは寮生活 後に結婚し子どもは二人	事業所就職
Q男	自己客観視の芽生え	事業所就職 (家業を継ぐ) 親と同居 結婚しない	授産所を経て事業所就職、できたら就職 親と同居 後に一人暮らし	事業所就職
R男	自己客観視の芽生え	事業所就職 アパート暮らし 結婚する 子どもは4人	事業所就職 家族と同居する 将来は兄と一緒に生活する できれば結婚したい	事業所就職
S男	自己客観視の芽生え	事業所就職 親と同居 結婚する	作業所就労、できたら就職 親と同居 一人暮らしは無理なので誰かと一緒に住む	作業所就労
H子	自制心の確立	その都度、友だちの意見に従う 親と同居	作業所就労 親と同居し、後に入所型施設に入所	作業所就労
I子	自制心の形成	分からない 母親と同居	作業所就労 親と一緒に 結婚はしない 住む所等、分からない	作業所就労
J子	自己客観視の芽生え	事業所就職 家族と同居 結婚する 子どもは二人	授産施設就労、後に事業所就職 家族と同居 将来は妹と一緒に住む	授産施設就労
K子	自己客観視の確立	事業所就職、結婚後仕事を辞め、育児をする	事業所就職 結婚後も働く 結婚相手の家族と同居し、子どもは欲しい	事業所就職

自己内対話の段階からも、H子、I子は将来の自分の姿を描くことは難しかったように思う。しかし、卒業を控えた高等部の段階では、生活年齢を無視することはできないと考え指導を継続した。自分の将来の姿を卒業して10年後に設定する段階までであれば、生徒にとって自分の姿が比較的捉えやすいようであった。

(6) 考察と今後の課題

具体的に自分の将来の姿を描くとはいっても、描く基準または価値が設定しにくいために、目前に迫った社会参加のあり方を中心に考えさせてきた。従って、基準を「社会参加の方法としての労働」「人との関わり」「住む場所」に絞って描かせてみた。その他にも、「趣味」「娯楽」等についても指導を行っているが、生徒の関心は卒業後の進路先に傾く傾向がある。しかし、それはまた、現在の自分を強く意識し考えていることにもつながっているのではないかと考える。

(白水)



「私の一生」の表